

Newsletter 24

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第24号 / 2014年5月15日発行

Contents

- 巻頭言 日吉が大事だという話
- 特集I 【公開・連携する学び】「日吉キャンパス公開講座」
- 特集II 【公開・連携する学び】「シェイクスピア・ワークショップ」、「実験授業・日吉学」
- 特集III 【一筆入魂】
モーツァルトオペラ／身体知・音楽／学生論文コンテスト／
アカデミック・スキルズ／身体知・映像
- 特集IV 進化する学習相談アワー
- 特集V 研究サポート「研究の現場」から 小原正／芦野文武
- 活動予定 4月～9月、カドベヤの当たり年
- 私の〇〇自慢



日吉が大事だという話

教養研究センター所員 研究・交流担当

片山杜秀 (法学部)

Morihide Katayama

近代人の理想は全知全能。何でも詳しく知っていて、どんな難題にも的確な判断が下せる。人間の夢です。実際、夢の実現していた時代もありました。たとえばヨーロッパのルネサンス期。レオナルド・ダ・ヴィンチのような人が出ました。理系も文系もすべてを専門家の水準で知り尽くしている。芸術的才能も発揮する。レオナルドは天才だったのでしょうか。そうには違いありません。しかし、全知全能になるために必要な知識の量が、今日よりはずっと少なかった事実にも留意すべきでしょう。ルネサンス時代の物理学や経済学や航海術を知り尽くすことは、天才でなくてもできたかもしれない。ところが現代ではもう無理です。ルネサンス時代とは何桁か違う量の知識が蓄積されているのに、人間の寿命は昔と大して変わらない。現代では人が一生をかけたとしても、金属工学なら金属工学の、さらにその中の原子炉を作る合金の専門家とか、そういう小さな一分野にかぎって専門を極められるくらいが関の山なのです。

本当は全知全能になりたい。でも近代の知識の増大が夢を不可能にした。人間のたいなる挫折です。しかもこの挫折は放っておいてよいものではありません。確かに社会全体は人間が分業すれば回すことはできます。小さな分野の専門家をたくさん組み合わせれば、どんなにややこしい世界も、その面倒を社会全体として見続けることは可能でしょう。

しかし、全体としてはそれでよくとも、人間個々はそれでは困ります。お医者さんが居たとしましょう。彼か彼女は健康や病気には詳しくても、たとえば社会福祉や株式相場については素人でしょう。原発事故やTPPや集団的自衛権について判断を求められても、よく分からないのが普通でしょう。でも、この世で当たり前に生きていれば、よく分からないことが日々に関係してくる。投資に失敗するとか、災害時に逃げ損ねるとか、法律を知らずに詐欺にあうとか、選挙時に政治的判断をできずに支持政党を間違えるとか、結婚相手を間違えるとか。リスクが山の様に降りかかる。人間は自分の専門だけでは生きられない。ところがすべての分野を熟知できない。他人が教えてくれるとも限らない。結局自己責任。

さあ、困りました。この危険に満ちた世界をなるたけ間違えずに漕ぎ渡すためにはどうすればよい。そこでの最後の頼みの綱が教養なのです。広く深く。全知全能。それはもはや不可能。しかし、部分的に狭く深く(=専門人)。あとは広く浅く(=教養人)。いざというときは浅いところをすぐ掘り下げられるようにしておく。それならできます。

人間は、専門家だけれど無教養、教養人だけれど無専門、無専門で無教養、専門家かつ教養人、以上の四種類に分けられます。大学の理想は専門家かつ教養人を育てること。教養なくしては必ず人生のどこかで、きっと何度も痛い目に遭う。教養の積極的意義、日吉の存在意義について、どんどん発信していこうではありませんか。

公開する学び

2012年に教養研究センター開所10年を迎えたことを機に、企画の公募制やキャンパス間の知の連携を進める活動をさらに展開しています。その目的は、多くの方々に活動に関わっていただくことでセンターへの理解を広げることはもちろんですが、企画者自身の教育や研究の関心を掘り起してつなげる人的な交流の糸口を提供し、ひいては日吉キャンパスが学問の府となることをめざしています。大学の教員には教育と研究のどちらも車の両輪として必要不可欠であり、かつ両輪は互いに支え合う存在であります。専門が特定されず学部を超えた存在であるからこそ可能になる実験的な取り組みに、どなたでも参加できる開かれた環境を作ることが教養研究センターの役目であろうと考えています。

(不破有理)

日吉キャンパス公開講座・特別講座

「人の形」と人のつながり

本年度の日吉キャンパス公開講座「人の形—身体の変遷と認識、身体は今とこれから」は、10月から12月にかけて、全18コマが無事に開講されました。公開講座のテーマ設定には毎年ひじょうに神経を使うものですが、本年度はじめて委員長を仰せつかった私は「とにかく自分の興味のある対象を選び、聴講したい先生方をお呼びしよう」という方針で企画を立てました。また、人形や身体というテーマならば、文系、理系、医学系、体育系を問わず塾の幅広い人材を存分に活かせるとも考えました。

今回により嬉しかったのは、私が最初に思い描いた講師陣の青写真がほぼ完璧に実現したことです。塾外の先生方、たとえば人形劇団ひとみ座さん、文楽がご専門の伴野久美子氏のご出講は小菅隼人先生のたいへん貴重な助言によって叶いました。塾内の教員につきましては公開講座委員の諸先生方が懇意になって紹介の労をとってくださいました。そのほか数多くの方々のご尽力によって実現した「夢の」講座、それをいちばん楽しんだのはほかならぬ私だったでしょう。分野を異にする講義と講義がふと呼応し合う瞬間には、まさに息を飲むような面白さがありました。三百名近くお集まりいただいた受講者のみなさまにもその妙味を味わっていただけたか、アンケートの結果が楽しみです。

今後、「人の形」を考えることでできた人のつながりを自身の研究に活かし、同テーマをひき続き考察していこうと思っています。

(新島 進)

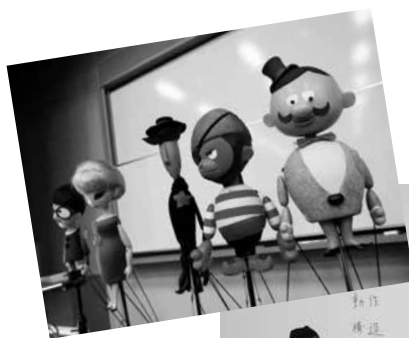
出版文化の歴史から学ぶ

近年のデジタル化の発達により、国内外の出版事情は大きく変わりつつあります。本とは何か、出版はどこへと向かうのか。先人たちが育んできた出版文化の歩みを振り返ることで、こうした問いを考えるべく、全3回にわたる特別講座「出版文化史の東西」を開催しました。出席者総数は200名以上（重複も含む）にも及び、盛況の内に終了いたしました。

毎回の講義では、塾内外の専門家をお招きして、中世から近現代にまで至る日本とイギリスの出版文化の特徴や変遷について、具体的な書物の観察を通してお話いただきました。比較文化史的な視点から両国の同時代の出版文化を眺めることで、あらたに多くの共通項や発見が見出されたように思います。また教室内では、講師の私蔵書や日吉メディアセンターの貴重書の展示も行われ、書物を実際に手にして観察する楽しさを体験していただけたようです。

慶應義塾は、和漢洋いずれにおいても書物研究をするうえで国内屈指の環境を誇ります。優れた書物史家を輩出してきただけでなく、第一線で活躍する研究者も塾内には多くいます。本講座をきっかけとして、今後も慶應から書物史（研究）の魅力を発信し続けることができればと願っています。

(徳永聡子)



人形劇団「ひとみ座」の講義



それぞれの講義でスライドや資料も多数登場した「出版文化史の東西」

連携する学び

実験授業、公募始まる！

教養研究センターでは「学生が自ら問題を発見し解決する」ことを目指した創造的発想力・論理的思考力・総合的な言語力をはぐくむ実験授業の公募を開始しました。大学の大綱化以降、教養教育の重要性が叫ばれて久しいですが、教養教育のための教育メソッドは未だに確立されていないといっても過言ではありません。それだけ教養教育のメソッドの開発は難しいということでしょう。こうした状況を踏まえ、教養研究センターでは教養教育のためのメソッド開発を試みる先生方を支援することに決めました。2014年度は試行期間としていますが、2015年度からの実験授業の申請を10月末まで受け付けています。結果は12月末ごろ公表する予定です。奮ってご応募下さい。（大出 敦）

恐るべし、ことばの力： シェイクスピア・ドラマ・ワークショップ第5弾

冬至の寒さを払う学生の熱気。ニール・マクリン教授の一声で身体と声のウォーミングアップが始まると、参加者は即座にシェイクスピア・ドラマにからめ捕られました。今回は『ジュリアス・シーザー』。初日から人の位置や動きや発声を変化させるだけで、シーザーが庶民派にも独裁者にも豹変する解釈が表出。さらにわずか数行のやりとりからブルータスと暗殺者たちの駆け引きを読み解くマクリン氏は圧巻です。2日目はいよいよアントニーの演説。シーザーを弔うはずの演説が徐々に民衆を扇動していく場面はことばの力と人間心理の恐ろしさを体感。日本語で輪読の後、英語で意図的に声の高低大小の変化を付けながら繰り返すうちに、ことばが身体的直感と結びつき登場人物の感情となり飛び出してくる瞬間はまさに身体知の意味を知る瞬間でした。英国の大学では学生によるシェイクスピア劇が行われますが、その意義を理解したワークショップとなりました。（不破 有理）

シェイクスピア・
ドラマ・ワークショップ



実験授業・日吉学



日吉台地下壕から学ぶ

今年の日吉学は、回数を増やし、フィールドワーク後のグループワークや討論の時間を充分確保できるようにしました。

歴史のパートでは、今回も、地下壕をはじめとするキャンパス内の戦争遺跡を見学します。昨今の国内外の情勢は、歴史とは何か、アジア太平洋戦争はどんな戦争だったのかをしっかりと覚えておくことの大切さに、改めて気づかせてくれるような状況になっています。歴史を学ぶには、本を読むことも必要ですが、生の資料に触れつつ歴史が構築される過程を体験したり、討論を通じて歴史には多様な解釈があり得ると実感することがとても重要です。今回も、皆さんに地下壕に入坑してもらい、なぜ日吉キャンパスにこんな巨大な施設が作られたのか、そしてそのことが、激しい空襲を受けながら本土決戦へと突き進もうとしていた当時の日本の状況と、どのように関わっていたのかを考えてみます。

こうした経験が皆さんの「歴史と向き合う力」を養う機会になればと思っています。（安藤広道）

日吉の森で自然を学ぶ

日吉記念館の向こうには、日吉の森、と呼ばれる雑木林が広がっています。昔話の舞台となった雑木林は都市から急速に消えつつあり、1200種を越える生物が暮らす日吉の森は、たいへん貴重です。

この授業では、昨年度に引き続いてグループごとにテーマを決めて日吉の森に出かけます。森の中を歩きながら、花や実や虫などを探します。テーマの生き物を見つけたら種類と場所を地図に記録し、デジカメやスマホで撮影します。日吉の森の景観を一望できるポイントでは、雑木林の成り立ちや管理について学びます。観察から戻ったら地図に見つけたものをプロットし、日吉の森で暮らす生き物たちの世界を再現しましょう。

雑木林の風景や観察できる生物は、季節ごとに大きく変化します。また、同じ季節であっても年によって観察できるものは異なります。自然の中での体験は一期一会なのです。もう二度と出会えない生き物を観察することが出来る。それがこの授業の醍醐味です。（福山欣司）

【日吉学】(2014 年全 7 回) スケジュール

- 4月26日(土) 個人のアイデアを融合して革新的なアイデアを生み出すには?
- 5月10日(土) 日吉の森のホットスポットを探そう
- 5月17日(土) 日吉の森のランドマークを決めよう
- 6月7日(土) 探せ! 日吉の「スリパチ地形」
- 6月14日(土) 描こうGPS地上絵
- 6月21日(土) 探訪、日吉の戦争遺跡
- 6月28日(土) 日吉で学ぶアジア太平洋戦争
- ※ 各回とも13:30～17:00 会場: 第4校舎B棟22番教室



日吉学
地下壕探見

慶應義塾コレgium・ムジクム・オペラプロジェクト 2013 《コジ・ファン・トゥッテ》

本プロジェクトにおいては、慶應義塾教養研究センター設置科目である、「身体知・音楽Ⅰ/Ⅱ」の一環として、モーツァルト作曲《コジ・ファン・トゥッテ》（全幕・原語上演、日本語字幕付き）を上演いたしました。これまで日吉音楽学研究室は、さまざまなイベントを、教養研究センターを通じてしてきましたが、今回のオペラプロジェクトは、いままでにない大規模なものとなりました。このオペラの上演には、休憩も入れて3時間半必要となるのですが、それを計4回（2013年12月21日・22日、および2014年1月4日・5日）、日吉キャンパス協生館藤原洋記念ホールで行いました。

日吉音楽学研究室のイベントとしては、初の有料公演でした。たいへん多くの方々に来場していただき、4公演日とも満員御礼となりました。なお、このプロジェクトは、慶應義塾未来先導基金事業、横浜市による横浜芸術アクション事業（横浜音祭り2013）およびクラシックヨコハマの事業の一環としても扱われました。学生による参加者は、総勢で60名以上となり、それぞれの学生はこのプロジェクトを通じてさまざまなことを学ぶことができました。

（石井 明）

一筆入魂

「身体知・音楽」の履修を終えて

私の所属する声楽クラスは、楽譜の音符を美しく歌うことだけを目標とするではありません。授業では、作曲された時代の演奏習慣を踏まえた指導が行われます。

クラスには、私を含めこの時代の音楽に馴染みのない学生も多くいますが、授業で歌唱の発音や演奏習慣などを学んでいきます。今年度はオペラに出演する機会があり、総合芸術としてのオペラの舞台上でどうふるまうのかを考えさせられました。先生方の指導の下、歌唱からふるまいまでを理解し、再現する練習を繰り返しました。

読書や鑑賞を通じて作品を知ることはできますが、作品を演奏する時、言語や歌唱など身体を使った訓練が要求されます。この点で、「身体知・音楽」の授業は、頭の中だけで完結しない、実践的な授業でした。今後も、学生に学びの場を提供し続けることを願ってやみません。（文学部4年 伊達麻衣）

授業「アカデミック・スキルズ」

今年も無事、アカデミック・スキルズ・プレゼンテーションの履修者になりました。履修者は一時的な考察を行い、その過程を一通り体験し、論文のボリュームに合ったかというほど絞り込むこと。うな思いで味わったことに向き合ったかは、それぞれです。まさしく、大学という問いに対する、現実に直面しています。と同時に、難しさを実感した一年。一人一人の学生に越えられるよう適切に手助けすることのできる貴重

アカデミック・スキルズ・プレゼンテーション

2014年2月7日（金）に、アカデミック・スキルズ・プレゼンテーションが開催されました。菊池廣之助氏から、多くの方々にお越しいただき、総勢6名の代表とデモンストラターによる英語クラス履修者全体の成果を披露しました。全体的に「アカデミック・スキルズ」クラスの作品も上々でした。その後、聴衆からの質問が行われ、本年度は、1年）、銀賞は河村拓也氏（法1年）、中賞は、不破有理氏（法2年）、銅賞は、それぞれ受賞し、そのうち、最後に、菊池廣之助氏から、大会は盛況のうち

【2013年度学生論文コンテスト総評】大学の学びとは何か再び問われるとき

今年度で2度目を迎える教養研究センター学生論文コンテストは、残念ながら最優秀賞だけでなく優秀賞に該当する論文も見つからないという残念な結果に終わりました。とりわけ今回は「考え抜く力」が脆弱な応募論文が多いという印象を受けました。

コンテストには14点の応募があり、その内二次審査に残った論文は6点でした。真摯な動機の下に書かれ論旨に好感のもてる内容の論文が少なからずあったものの、調査したデータが自分の意見の根拠となっているわけではなく結論が唐突であったり、アンケート調査などを自ら実施したことは評価できても、その説明的分析に終始し、論文としての洞察に欠ける場合など、もっと粘り強く考え抜いてくれれば、と審査委員一同残念な思いでした。

審査では問題設定と着眼点に優れた論文もあり、審査員の注目を集めました。調査の結果、失格となってしまいました。着眼そのものが先行研究に負っているにもかかわらず、それを明記しなかったり、先行研究からの引用や要約の範囲と論文独自の主張の範囲とが曖昧にされていたり、参考文献としてあげられていない文献から孫引きを疑われるケースなどがあったためでした。

かなり厳しい結果となった今回の論文コンテストですが、その一方で論文の書き方講座には多数の学生が参加してくれました。今後は学生のニーズをうまく汲み取りつつ、論文執筆の倫理と技法を実践する場作りが問われていると感じています。（吉田恭子）

進化する学習相談アワー

気づきを引き出してよりよい相談の時間に

学習相談は6年目を迎えました。その中で、教えるのではなく相談者自身の考えを「引き出す」こと、つまり「気づかせる」ことを心がけています。初めは全く知らない分野の相談に対し緊張していましたが、それは「教えなければ」という気概から来るものであったように思います。身近な分野だと誘導してしまうこともあり、むしろ知らない分野こそまっ白な状態で話を聞き、考えを引き出せるようです。同時に、わからない所を質問することで相談者が理解度や疑問に気づくこともよく目にします。

またそのために導入したノートが双方にとって効果的でした。話を聞きつつ、テーマ選択のきっかけや疑問点をノートに書き出すことで「引き出す」、「気づかせる」ことがスムーズになります。また相談者もノートの写真を撮って帰ることが多く、思考整理法が身につくのではと期待しています。今後こうしたツールも取り入れながらさらに相談を充実させたいと思います。(東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻修士1年 渡邊めぐみ)

現代における大学内の学びの空間

ピア・メンターには「ピア(仲間)」と「メンター(導き手)」の2つの要素があると思います。この2つを両立させることが活動1年目の私の課題でした。「ピア」の側面では、相談者が自らの生きている日常の裂け目に気づき、沈思し、自分なりの問いや問題意識を形成できるよう、同じ学生として互いの考えや日頃からの疑問を気軽に共有できるよう心がけました。

「メンター」の側面では、相談者が思うままに話しやすくなるような傾聴を実践することや、相談者の漠然とした考えを言語化することなど、経験に裏打ちされた繊細な技術が求められる場面もあり、困難さを痛感しつつもやりがいを感じました。

同じ時代・社会を生き、同じ大学に通う学生同士で、学問における驚きや歓びを共有できたことを大変嬉しく思います。学習相談は自分にとって心躍る知的な時間となりましたが、自分の対応が相談者をより深い知的世界へともし導くことができていたら望外の喜びです。(文学部2年 坂牛 怜)



3 キャンパス合同トークセッション

3 キャンパス合同トークセッションから感じた慶應生の「学ぶ」意欲

昨年12月5日に開かれた3キャンパス合同トークセッションでは「なぜ慶應の学生は勉強しないのか」というテーマについて、各キャンパスの学習相談員が「学び」に対する自身の考えを主に1、2年生に伝えました。本トークセッションの目的は、日吉での「学び」が今後どのように生きていくのかを具体的にイメージしてもらうことです。

今回のトークセッションを通して、学習相談員は慶應生の旺盛な学習意欲を再認識することとなりました。たしかに一部の学生は、教養課程での学びと三田での研究活動のつながりに不安を感じていたようです。しかし、多くの学生は三田での研究活動を視野に入れ、自主的に学習に励んでいることが分かりました。今回のトークセッションは、主催した学習相談員自身が「学び」の姿勢を再考する良いきっかけとなりました。(日吉ピア・メンター 小山高義)

学びの方法

各キャンパスの学生が抱えている悩みは、実は全く違います。

日吉キャンパスの悩みは大教室での授業が多いこと、矢上キャンパスでの悩みはコミュニケーションの機会が少ないこと、SFCの悩みは基礎的なことを学ぶ機会が少ないことです。

各キャンパスに共通して言えるのは、与えられる教育の中だけに自分の可能性を限定してはいけない、ということです。どんな時でも忘れないでほしいのは、私たちは選択できる、ということです。もちろん慶應義塾大学には素晴らしい研究者がたくさんいるけれど、だからといって塾内だけにこだわる必要は全くありません。各分野のトップレベルの研究者たちは、世界中に散らばっているのです。世界の中にベストな学びの環境を探しに行き、自分の夢を実現すること——それが新しい塾生の学びの方法だと思います。(矢上 S-Circle 細井響子)

慶應内のリソースを知り、活用する

今回のトークセッションで私は、慶應内のリソースについて良く知り、それらを有効活用することで日々の学習および研究環境をより充実したものにする、というメッセージを伝えました。

大学におけるリソースとは、人的リソースから高価な機材や施設、そして各種サービスを含みます。学生の皆さんは授業を受けゼミに所属する事で普段から教員というリソースを活用していることでしょう。しかし、専門知識を持つ職員、慶應が提供するサービスや情報資源を十分に活用出来ていますか? 例えば、メディアセンターなどの充実したサービスやリソースは他大学に負けない質と量があります。我々が運営する学習相談窓口もその一つの良い例です。身近なところに存在する環境を意識し有効活用して頂く事でより充実した学生生活を送る一助になることを願っております。

(SFC ライティング&リサーチコンサルタント (WRC) 直江健介)

研究サポート「研究の現場から」

〈第9回〉砂金と砂糖

——メキシコ南部におけるスペイン人の征服者の経済活動

16世紀前半、アメリカ大陸の征服を勇猛果敢に、そして暴虐のかぎりをつくして行ったスペイン人たちは、様々な経済事業を行う企業家としての一面も有していました。先住民に貢納と労役を課す特権をスペイン王室から獲得した征服者は、そこから得られる資源を用いて、多岐にわたる経済活動を行いました。具体的には、砂金の採取、砂糖生産とそのためのサウキビ栽培、そのほか小麦やカカオなどの商品作物の栽培、養蚕、畜産、そして運送業などがあげられます。私の発表では、1540年代のメキシコ南部、チアパス地方に的を絞って、スペイン人征服者が行っていた砂金採取と砂糖生産が、どのように発展し衰退したのかを紹介しました。

(小原 正)

〈第9回〉多義語と意味的同一性

——フランス語と日本語の例から

本発表では日本語とフランス語の多義語のうち、「イヤ」、「ダメ」、「bon」を具体例として、これらの語が持つ様々な意味を一つの原則から統一的に説明する方法論を紹介しました。この方法論は、多義語に「中心的な意味」を指定し、「周辺の意味」を前者の派生とする段階的な説明原理とは異なり、文脈を通じて観察される語の意味のヴァリエーションを支える「意味的同一性」（意味のポテンシャル）を抽象的な「操作」として再構築し、それぞれの意味はこの操作と文脈のインタラクションを通じてその都度「構築」されるという点を強調しました。発表後には発表者の取るアプローチの様々な側面に関して刺激的な議論を持つ機会に恵まれました。

(芦野文武)

第10回「研究の現場から」——研究と人の交差点——

専門や学部の枠を超えた研究・交流を目指すセンターならではの円卓サロンは、いよいよ10回目を迎えます。日吉キャンパスは多様な分野の専門家の宝庫にもかかわらず、なかなか研究の話をする機会がない、学部以外の方と知り合う機会がないとお悩みの方々、美味しい飲み物と軽食でほっとしながらも刺激的なお話を聞きたいという方、共同研究のきっかけや新しい研究の着想をえられるかもしれません。着任もない近藤さん（英語）と川添さん（歴史）のお話をお楽しみに。予約は不要、ふらりとお立ち寄りください。

(不破有理)

2014年6月10日（火）18:15～ 来往舎101にて

川添美央子（商学部）

「感情と社会形成——スピノザを手がかりに」

近藤康裕（法学部）

「D・H・ロレンスの work における work について」

注目！ 研究会助成制度

この助成制度は教養研究センターの所員が企画する研究会やワークショップを支援することによって、さまざまな研究・教育の企画が日吉で開催される機会を増やすこと、また所員に公開していただき日吉における研究の情報交換の場を広げることを目的とします。助成は開催に伴う経費（謝金、印刷費など1件上限10万円）と日吉キャンパス内の広報の支援を負担します。年2回1月と7月の月末に締め切ります。春学期の企画は1月、秋学期分は7月にご応募下さい。次回の締切は7月31日。詳細は教養研究センター事務室へどうぞ。

求ム・来往最前線情報！

所員の方々の研究・教育をご紹介します。勉強会、研究会、講演会、ワークショップのお知らせ（日時・内容・研究会名・担当教員・連絡先）、著作刊行物がありましたら、情報をお寄せ下さい。教養研究センターへ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

教養研究センター選書14

ベースボールを読む

野球はもはやアメリカ第一のスポーツでないにもかかわらず、ベースボールは今日もアメリカの象徴として機能しています。その重要性や象徴性はベースボールのプレーの中に自律的に存在するのではなく、ベースボールといういわば単なる遊びがことばによって意味づけされるとき、その歴史があたかも首尾一貫した物語であるかのように語られるとき、そのイメージが人々に消費される映像作品として流通するとき、ベースボールは表象され、比喩的媒体としての価値を帯びてくるのです。本書は、アメリカの「国民的遊戯」が文学作品や映像作品で表現される際に見られる特徴を分析し、そこに透けて見えるアメリカ文化の姿、人々の希望と欲望、端的に言えばアメリカの神話としてのベースボールを考察します。ベースボールそのものが国戯なのではなく、ベースボールをめぐる表象が国戯としてのベースボールを支えているのです。

(吉田恭子)

*今年度も選書原稿を公募します。事前申込締切は7月25日（金）、原稿の締切は9月26日（金）です。



【HAPP】 日吉キャンパス体力測定～君の秘めた能力を探せ～

4月12日（土） 10:45～14:30

日吉陸上競技場および協生館体育施設

**【HAPP】 <ことばの世界> 第2回：安西祐一郎
「ことばの力が必要なとき」**

4月21日（月） 18:15～20:00 来往舎シンポジウムスペース

【日吉学】 4月26日（土） →特集Ⅱ

【日吉学】 5月10日（土） →特集Ⅱ

**【情報の教養学】 第2回：永野智久
「データでサッカーの見方がどう変わるか!？」**

5月28日（水） 16:30～18:00 来往舎シンポジウムスペース

**【学会・ワークショップ等開催支援制度】
アメリカ研究ワークショップ**

6月12日（木） 日吉キャンパス内

【日吉学】 6月14日（土） →特集Ⅱ

**【情報の教養学】 第3回：新保一成
「データで貧困を考えよう」**

6月19日（木） 16:30～18:00 来往舎シンポジウムスペース

【HAPP】 日吉音楽祭 2014

7月の2週間 協生館藤原洋記念ホール

【教養研究センター選書原稿募集】

事前申込み：7月25日（金） 原稿締切：9月26日（金）

4月

【HAPP】 中嶋夏舞路講演

<煙のように 灰のように>—Like Smoke Like Ash

4月16日（水） 18:15～20:00 来往舎イベントテラス

**【情報の教養学】 第1回：茂木健一郎
「脳と情報、ネットワーク、創造性、共創」**

4月16日（水） 18:15～20:00 来往舎シンポジウムスペース

**【HAPP】 <物語の世界> 第2回：伊藤壺
「古英語叙事詩とホビットの冒険」**

4月25日（金） 18:00～19:30 来往舎イベントテラス

【日吉学】 5月17日（土） →特集Ⅱ

【日吉学】 6月7日（土） →特集Ⅱ

第10回 【研究の現場から】

6月10日（火） 18:15～ 来往舎 101 / 102 →特集Ⅴ

川添美央子（商学部）

「感情と社会形成……スピノザを手がかりに」

近藤康裕（法学部）

「D・H・ロレンスの work における work について」

【日吉学】 6月21日（土） →特集Ⅱ

【日吉学】 6月28日（土） →特集Ⅱ

**【学会・ワークショップ等開催支援制度】
第9回日独スポーツ科学会議**

9月17日（水）～19日（金） 来往舎

*各イベントへのお問い合わせは、toiawase-lib@adst.keio.ac.jpまで

5月

6月

7月
9月

カドベヤの当たり年

2013年は石川町にあるオルタナティブ・スペース「カドベヤ」にとっていろいろな意味で「当たり年」でした。遅めの大型台風に見事に「当てられた」10月の火曜日も、休業することなくカドベヤを開けることが出来ました。12月はクリスマス・イブに大晦日とどちらも火曜日に当たりましたが、大勢の皆さんに来ていただきました。大晦日には、8月に土人形の絵付けワークショップのために酒田市から来てくださった鶴渡川原人形伝承の会の方々再訪していただき、年越しそばを食べながら、東北の昔話に聞き入りました。「火曜日はどんなことがあってもカドベヤは開いているんですね」。初めて参加された方に聞かれて「はい」と答えながら、この場所が少しずつ、皆の居場所になってきているんだという実感をかみしめた昨年。2014年はそんなカドベヤから何か新たな発信ができる、「当たり年」にしたいと考えています。（「カドベヤで過ごす火曜日」のブログ <http://ameblo.jp/kadobeya2010/>）（横山千晶）

私の^{マルマル}散歩道自慢

多摩川の土手を、休日に散歩することがあります。主に東急東横線の多摩川駅近くの丸子橋と下流のガス橋の間です。川原には、土の運動場、ゲートボール場、児童公園、ゴルフ練習場、野球やサッカーのグラウンド、テニスコートなどがあり、真夏の昼間を除けば、生徒・学生をはじめ、多くの人に利用され、意外といつも賑やかです。土手は舗装されていて、サイクリングやランニング、散歩をする人などで、夕方はけっこう混んでいたりします。

春、ガス橋付近は、桜、桜、桜の大並木です（但し、夜のライトアップはありません）。最近、「多摩川に鮎が戻ってきた」等の特集番組の放送があったりしますが、岸辺で釣りをしている人を見かけることがほとんどないのが、少し不思議です。自動車を避けることも、信号を気にすることもなく、清々しい川風を受けながら、四季折々の景色を眺め、ただただ気持ちよく歩ける多摩川の土手がとても気に入っています。この欄を借りてご紹介させていただければと思います。（山口 中）



Newsletter
May, 2014. No.24

慶應義塾大学教養研究センター（Keio Research Center for Liberal Arts）

発行日：2014年5月15日 代表：不破有理

〒223-8521 横浜市中区日吉4-1-1 TEL: 045-566-1151 Email: lib-arts@adst.keio.ac.jp
<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>